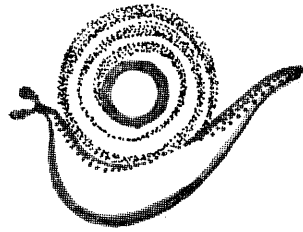


私の保育



笹田 キミコ

(山口大学教育学部附属幼稚園)

幼稚園の教師となって七年目をむかえた。新卒の頃の

私は、子どものすることに予想も立たず、ただ、めまぐるしく毎日が過ぎ、何もかもが、初めての経験にもかかわらず、子どもたちの言動に新鮮な驚きを感じる余裕もなく、子どもの走り去った後を追いかけていたように思う。

また、子どもにとって「自由な活動」が大切だときかされても、本当にはその意味がわからず、自由よりも放

任に近いような保育だったのだと思う。

七年目を迎えた今、まだ、何を見ても迷うことの多い私ではあるが、最近では、違った意味で、子どもの後を追うことができるようになってきたように思う。というのは、子どもが今何をしているのか、それは何故しているのか(何故しないのか)、これからどうしたいと願っているのかなどということ、子どものしていることの中からみとっていくことが、子どもの生活を豊かにしてい

く第一歩になるのだと考えるようになったことと、それが、少しずつではあるが、見えることがあるようになってきたということからである。

そして、子どもに何かを教えたり、与えたりすることの前に、子どもと人間としてのつながりをもった幼稚園の生活にしたいと考えている。

この四月、私は、二年保育の四歳児の担任になった。四歳児を受け持つのは、これで四回目である。しかし、五歳児のクラスを、ここ二年程続けて持っていたためか、四歳と五歳の一年の差とはいえ、ずいぶん違いがあるのだと改めて感じさせられた。クラス集団として、ある程度のまとまりを持ってきている五歳児と比べて、特に入園当初の子どもたちひとりひとりに対して、新鮮な驚きがあった。その中で、教師と子どもとの関係が、教師対集団ではなく、一对一の関係が基本であることの必然性、大切さを感じさせられた。この例としては、適切ではないかもしれないが、降園時の「さようなら」のあいさつにしても、私は、形式的なあいさつに、自分自

身、陥っていたように思う。私ひとりが「さようなら」と子どもたちに向かって言い、子どもたちが全員で号令一下、「さようなら」と声をそろえておじぎをすること、を、ただ、漫然と当たり前だと思い込んでいた。入園当初の子どもたちは、「じゃあ、今日はこれで、さようならしましょね。」と言うと、子どもたちひとりひとりが、私に向かって、手を振ったり、「さよなら」と言い、それぞれが私とあいさつを交わそうとする。それを見ながら、これが本当のあいさつだなと思った。ひとり対全体であいさつをすること、集団であることから、そういった形式が必要だとも言えるのだろうが、基本は、ひとりひとりがお互いにあいさつを交わすことである。「今日は楽しかったね。また明日ね。」といった気持ちで、視線を合わせながら、あいさつはするものだと改めて思った。私のいる園では、朝のあいさつは、そういった意味で、ひとりひとりと交わすようにしているのだが、降園時のことについては、意識していなかったと思う。

そういった当たり前のようにいつも行なっていること

を考え直すことを、この例は、たいしたことではないかもしれないが、怠らないように、大切にしたいと思う。

そして、日々、子どもがしていること、それを大切に、それがより豊かなものになっていくよう援助していきたいと考える。

次は、入園して二か月足らずの頃、ずいぶん、色々な物を自分たちで持ち出して遊ぶようになってきた頃の一日の記録である。

〔四歳児 6月2日（火曜日）の記録から〕

登園し、着がえ等をすませると、ほとんどの子が、自分のしたいことをみつけて遊びはじめる。固定遊具の方へ出て怪獣ごっこをしているグループ、クローバーをつんでうさぎにやっているグループ、ままごと道具を持ち出してグルーブ……。

真利子、江理子、真美、真理、梨江らが、保育室の中で、ままごを始める。机の上に皿を並べ、砂を持ち込み始めた。先日来、砂と水を持ち込んで、部屋の中がベトベト、ザラザラになり、お弁当を食べる時など、床が

ぬれていて気持ちが悪いという経験をしている。砂は外で使うようにさせたいと思い、「お家を外に作って遊ぼう。そうしたら、砂を使っても大丈夫だからね。」一緒にままごと道具をテラスの方へ運び出す。彼女たちはそこで砂と水を混ぜたり、草をちぎって入れたりなどの料理を続けている。

真利子は、私が、テラスのそばの芝生に広げておいた四角いシートの上に、いすを三脚運んで来て並べ、その上にごちそうをのせた皿を並べる。フォークとスプーンも添える。包丁がそばに置いてあるのを見て（誰が置いたのか不明）「また、誰かちがうことしてる」と言いながら、テラスの机の方へ持っていく。いすをもう一脚持つて来て、ごちそうをのせた分と向かい合わせに置いて「先生、どうぞ」と言う。私が「ごちそうになります。でも、どこから入りましょうか。」ときくと、真利子は「どこからでもいいですよ。」と言っていたが、「ここにしよう」とシートの角に上靴を脱いで上がる。私もついて上がり、いすに腰かける。由紀子が、先程からまわりを

行ったり来たりしていたので「由紀子ちゃんもごちそうになる？」ときいて誘ってみる。うなずくので、真利子に「由紀子ちゃんにもごちそうしてあげて」と言うとうなずいていすをもう一脚取りに行く。

私が居るためだろう、シートの所へ江理子、尚代、大介、充隆、聡美が、ままごと道具をかかえてやって来る。

「お友だちが来たの。」「泊まりに来たの。」など言っている。人数が増えたので、私は、もう一枚シートをかかえてきて、そのそばに敷き、家を広くする。それを見て、真利子が「二階ができた」と言う。そこへ毛布を持ってきて、「泊まる人は、これに寝てもいいですよ。」という、宏通がごろんと横になったので、上から毛布をかけてやると、尚代、大介、聡美も入りこんで寝る。

保育室では、真理がテラスからままごと道具をきれいに洗って持ち込み、つみ木を積んだ所をおうちにしていく。そこへ、それまで外でサン・バルカンごっこをしていた義伸、環、誠、正博がやってきて「広いおうちを作ろう」ということになる。宏明、昇平も外から帰ってき

て、この場へ加わる。つみ木を平たく敷きつめたものがいくつかでき、それに他のつみ木で橋をかけてつなぐ。

真理は、そのうちのいか所につみ木を重ねて机にし、その上に皿やコップを並べる。昇平らは、三角のつみ木に板を乗せて、シーソーを作り、しばらく、それに乗って遊ぶ。義伸が「僕がお父さん」と言う。誰も何も答えないが、そのことは認められたようす。

幸世は、赤の色画用紙を水に浸していたが、赤い色が出ることに気づき、それを葉（赤チン）にすることを思いついたらしく、皿にそれをちぎって入れ、芝生をむしったのも入れて、テラスの端に台を持って行ってその上に置く。自分がすわるいすをもってくる。もう一脚持ってきて、自分の前に置き、「私、お医者さんよ。けがしたら来てね。」と私に言う。「ねえ、幸世ちゃん、お医者さんですって、けがをしたら来てくださいって。」と、まわりにいる子へ知らせると、三・四人が寄って来る。宏通がいすに腰かけ「けがした。」と言うと、幸世は顔をのぞきこむようにして「嘘ごと？」ときく、宏通がうなず

くと、何か言いながら、色画用紙の薬をその足にすりつける。私は、まわりに立っている子へ「待っているところがあるといいですね。」といすを持っていき、「待っている人は順番にすわってください。」と声をかけ、すわらせる。幸世は、「どこが悪いんですか。」ときいては薬をつけ、小さな紙をセロテープではりつけたりする。（ほんそうこのつもり）まわりにいた子が次々と何度も診察を受けに行き、病院は大繁盛。環は、「病院へ行ってみよう。」と誘ってみても「いい。」と行かなかったが、環のいる家のお姉さん役の真理が行っているのを知ると、誠、正博、昇平らと走って行き、幸世にみてもらう。

芝生の上に、江理子、充隆、聡美がもう一軒、病院を作る。真弓がいすにすわっており、その前にごちそうを並べてもらっている。彼女が食べようとせず、ムスッとした表情をしているので、「どうしたの。」ときくと、「（私は）赤ちゃんだから、食べさせてくれんと食べられないの。」と言う。聡美がそれをきいて「私がやってあげる。」と食べさせる真似をし、真弓も食べる真似をする。真弓

とマユミは、入院中ということで、毛布をかけられている。真弓の方は、首から腕に白いエプロンを巻きつけられている。けがをしているので、包帯をされているのだそうだ。お弁当の時間が近づいたので、戸外に出していたものを保育室の中へ運びこんでかたづけ、お弁当の準備にとりかかる。

＊

＊

子どもとともに生活し、ともにその生活をつくってきたいと考える。子どものしていること、しはじめたことから、保育を進めていきたいと思う。が、子どものしていることから何をとらえ、それに対して私は何をどう援助すればよいのだろうか。ちょっとしたことで、子どもの活動が広がったりすることもあれば、いくら、あくせくと働きかけていても、活動が停滞してしまうこともある。これは、私が働きかけたと思っていても、子どもにとっては意味の無いことをしていたからであろう。まだまだ、子どもの見方が浅いのだと思う。もっと、子どもを深くみつめられる教師になりたいと思う。